
エターナルコア

鉢嶺来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エターナルコア

【Zコード】

N7387L

【作者名】

鉢嶺来

【あらすじ】

この世にはウィザードという魔法を使える人種とそれ以外の人種、コモナーが存在する。

ある戦争でコモナーの傭兵「赤髪のバーギル」はウィザードと初めて出会い、その絶対的力の前に無残に敗北する。

あのウィザードは俺が殺す。そう誓ったバーギル。

それからバーギルとウィザード・パーティーシアとの因縁の日々は

続いた。

そしてパーティーシアには重大な秘密が隠されていて……？
魔法アクション活劇、ここに開幕。

パーティーシアとバーギル

飄々とすすき野が啼く荒野・・・
一つの人影が争いを繰り広げていた。

緑色の髪をたなびかせ漆黒のコートを身にまとつー7・8歳の女。
赤色の髪が目に覆わんばかりに隠れ、長剣を振るつ24・5歳の
男。

女が呪文を唱え杖を振りかざすと空中にルーンの文字が浮き上がる。

ルーンから次々と発射される炎の矢。

男はそれらを回避し、長剣で叩き落す。

「貴様との決着を、今日つける！」

男はそう叫ぶと一足飛びで女の下へと飛び込んだ。

刹那、

長剣が女へと振り下ろされる。

…が、女は一瞬にしてその場から消え、そして男の頭上高くに姿を現した。

「フレイム」

女がそつと杖を下へと向ける。

ルーンが表れ炎の矢が男の頭上を襲つた。

「ゴウ！」

男は長剣を薙ぎ、炎の矢を搔き消す。

「パーティーシア…覚悟…！」

そのまま男は女…パーティーシアに突きを繰り出す。

「ハグリ！」

パーティーシアがそう唱えると障壁が現れ長剣を遮つた。

「フロテイン」

ふわりとパーティーシアの体が浮き上がり男のおよそ三三先へと着地した。

「あなたでは私に勝てないわ、バーギル…」

「なんだと…・…・…？」

「わかるでしょ？…？あなたがどんなに凄腕の傭兵だったとしても所詮は剣士、魔法使いには勝てないのよ」

「この世には魔法を使うもの、ウイザード、そして魔法を使えない

もの、コモナーがいる。

そしてそれに付きまとつ一つの常識。

「コモナーはウイザードには勝てない。

バーギルはそれを打開したくて傭兵になつた。

腕も磨いた。

それはもう「赤髪のバーギル」と呼ばれるほどだ。

そして1年前、とある国の戦争に参加したバーギルの前に姿を現したのがパーティーシアだった。

バーギルにとつて初めて見るウイザード。

その力は圧倒的だつた。

2万対1。

そのウイザードが呪文を唱え杖を振るつ。

落雷が落ちて、炎が飛び、氷塊がバーギルたちを襲つた。

ほぼコモナーの傭兵で統率された軍団は抗つこともできず、「魔法」という絶対的な力の前にある者は焼かれ、ある者は戦意を失い逃げ出した。

2万いたはずのその数がほんの10分で1対1になつた。

最後に生き延びたのがバー・ギル。

死を覚悟したその時、そのウェザードは
「飽きたわ、どうせひとつんど壊滅状態だし、この辺でいいでし
ょ」
と言つて姿を消した。

その日からバー・ギルは「己の無力を呪い、嘆き、更に腕を磨いた。

打倒パーティーシア、それだけが生きる目標になっていた。

「終わりにしましょう、バー・ギル、この・・・無意味な戦いに！」

パーティーシアが叫ぶ。

「フレーミア」

杖をかざすとルーンが浮かぶ。

そこから音速ともいえる勢いで光が奔った。

「く…おおおおおー！」

すんでの所で横に避けるバー・ギル。

ドッゴオオオオオン・・・・・・！

光は遠くにある岩山に激突し岩山は木つ端微塵になつた。

「俺は…俺は負けん！」

長剣を構えなおすバーギル。

「これだけの力の差を前にまだ向かってくる勇気は認めるわ、だけ
ど…時間ね」

気づくと一人の周りに人影が二つあった。

「なんだ…貴様ら…！？」

バーギルが叫ぶ。

「あなたも私も組織を抜けて追われる立場…さしづめどちらかの追
っ手…かしらね」

そう言つたパティーシアはふう…と溜め息をつき、

「いや、両方の…と考える方が妥当かしり

パティーシアが言つや否や二つの人影はパティーシアとバーギル
目掛けて突っ込んできた。

「ちい…あの仕事を辞めたツケがこんな所で回つてくるとは…な！」

バーギルは振り返り人影のうちの一人に剣を振り下ろす。

しかし人影…30代くらいの男だろう…はその斬撃を避け「杖」

をバーギルへと向けた。

(ちいしゃーじいつ… ウィザードか…)

「… ファイアボール」

男が唱える。

咄嗟に田を瞑るバーギル。

しかし何時まで経つても炎の塊は襲つてこなかつた。

「…?」

男は不思議そうに杖を振りなおす。

「サイレンス… ウィザードならこの魔法… 知ってるわよね？」

サイレンス、それはウィザードが魔法を失つ「沈黙」の魔法。尤も、1流のウィザードなら戦いの前にサイレンスに対する事前策を打つている。

このウィザードにサイレンスが効いた事からパティーシアは「このウィザードは3流だ」という認識をした。

「何故… 赤髪のバーギルを助ける?」

男はパティーシアに向かつて言ひ。

「あら、だつて2対2でしょ?」

「ふざけんな！誰が貴様なんぞに！」

「貴方の相手は『」」れ』よ、バーギル」

槍を構えた男がパーティーシアに突進してくる。

「貴方との決着は後回し…まずは『」』つらから、ね？」

「…ちつ」

バーギルは長剣を構えなおすとパーティーシアの後ろへと移動し槍の男の突きを薙ぎ払う。

「ここは組んだ方が得策だわ、『モナーは『モナー同士、仲良くやりなさい、私はこの間抜けなウィザードの相手をしてあげる」

「どうやら…そつりしいなー」

バーギルの長剣が唸る。

槍を凌ぎ、攻める。

その光景を見てからパーティーシアはウィザードの男に振り返る。

「さて…貴方の力…見せてもらいましょうか…？」

不適な笑みを零しパーティーシアが跳んだ。

「アニメーション！」

「ウイザードの男は沈黙の魔法を解除する。

そして杖をパーティーシアへと向ける…がそこにパーティーシアの姿は無かつた。

「ルット モイ」

パーティーシアがそう呟えるとパーティーシアの姿が10に分裂した。

「…」

ウイザードの男は増えた目標に向かつて炎の矢を所構わず叩き込む。

「ロフレクション」

ウイザードの男とパーティーシアの間に障壁が発生し炎の矢を弾き返す。

そのまま炎の矢はウイザードの男に直撃した。

「ぐああああああああああああ…」

「止めよ… 3流のウイザードさん」

そう叫びパーティーシアは杖を掲げる。

「二二二二二二二二二二」

パーティーシアが唱えると、ウィザードの男の中に闇が出現した。

そのまま闇は、ウィザードの男を飲み込んでいく。

「どうかしら、虚無の味は？」

ウィザードの男は何も語ることなく闇へと消えていった。

「円月斬！」

丸く弧の字を描く様に長剣がバーギルの周りを奔る。

槍使いの槍は真つ一つに斬れて地面へと突き刺された。

「おおおおお！」

ズバッ！！

そのまま一閃。

バーギルは槍使いの体を切り払った。

「余計な手間をかけさせやがって……さあ、続きだ、パーティーシア」

「残念ねバーギル、まだみたいよ」

そう言つたパーティーシアは杖を振るつ。

すると一体何人いるのだろうか……とんでもない量の軍勢が2人を

取り囲んでいた。

「たかだか2人に…大層なもてなしだな…！」

「それもウイザードばかり…これほどひやら私の追っ手ね」

パティーシアはクルリと周りを眺め、

「私はまだ死ぬわけにはいかない…やるべきことがあるから…」

「やるべき」と…？」

「ええ…30秒、あの軍勢に耐えられるかしら?バーギル」

「たかが30秒で何が起こせる、パティーシア」

「あら、嫌だ…1年前のこと、もうお忘れ？」

ふふっと笑みを零し

「この天才ウイザード、パティーシアの本気…見せてあげるわ」

「ちつ…嫌な」と思いで出させてくれる…30秒だな!」

「ええ!」

そう言つとパティーシアは杖を天高く掲げる。

「Je le fais d'apres un contrat
et c'est le president de l'esp

r i t m a u v a i s

(契約に従いし魔性の住人よ) …」

「おおおおおお…！」

パティーシアが詠唱を開始したと同時にバーギルは地を蹴つた。

刹那、何百本という炎の矢がバーギルを襲う。

「なめる…なああああああああああ…！」

必要最低限の炎だけを避け前へ前へと突進するバーギル。

「J e n ' a p p o r t e p a s p l u i e d e l a
l u m i ? r e d ' a p r ? s u n c o n t r a t
t u i c i m a i n t e n a n t
(汝の契約に従い今ここに光の雨をもたらさん) …」

バーギルの剣は障壁によつて弾かれる。

その隙を縫うかのようにまた、何百という炎の矢がバーギルを襲う。

「がああああああああああ…！」

ウェザードの軍勢が一斉にパティーシアへと杖を向ける。

「させるかあ…！」

炎に包まれながらバーギルは叫んだ。

「蛇波斬！」

凄まじい勢いで唸りを上げる長剣。

それとともにバーギルを包んでいた炎がウイザードの軍勢へと押し返される。

しかし、それでも削つたのは100分の1にも満たなかつた。

パティーシアに向けて放たれる何百という炎の矢。

バーギルは無我夢中でパティーシアの前に立つた。

数百の炎に焼かれるバーギル。

Je retiens chaos et un tourbillon de la lumière dans cette main et ne fends pas maintenant ouvert ! (混沌と光の渦をこの手に宿し、今、弾けん！)

かつと見開くパティーシアの目。

その目は右側が銀色に左側が赤色に染まっていた。

「エクスプロージョン！」

詠唱を唱え終わった直後、パティーシアを中心に半径10kmが光の爆発に包まれた。

唱えられたエクスプロージョンはウイザードたちの障壁を容易く打ち砕き、粉碎していった。

「…………」

何分くらい氣を失っていたのだろう。

バーギルは目を覚ました。

「あら、目、覚めた？」

バーギルの体に風穴や火傷のあとは無かった。

「治癒の魔法をかけたわ」

「ふん」

「なんか、興が削がれちゃったわね」

「……貴様のやるべきことは……何だ?」

バーギルは仰向けのままパーティーシアに問いかける。

「……終端の阻止……よ」

「……言つてゐる意味がわからん」

「はあ、これから『モモナー』は学が無くつて嫌なのよね」

ナウルヒト・パーティーシアはコートを翻して、

「ついて来る？ 追われる立場同士……」

「……何を馬鹿な……」

「こつでも好きな時に私の命が狙えるわよっ。」

「……」

少し考え込んだ後バーギルはむくつと起き上がった。

「勘違いするなよ、あくまで決着をつけたためだ、つるぬ訳じやない？」

「あ～ら、怖いこと、いいんじやない？ 貴方にも今に分かるわ……この世の真実……っていうのがね」

そう言つたパーティーシアとバーギルは荒野を後にした。

- 某所 -

「パーティーシアの殺害に失敗」

報告にドン！と机に拳が叩きつけられる。

「おのれ、パーティーシアめ……あれだけの数のウイザードを葬るとほ…！」

「バークレイ様……『うつむけ赤髪のバーギルがパーティーシアについた模様です』」

「ふん、『モナーの一人くらこどもなる…』が、」

バークレイはまきつゝと歯を噛み締め、

「パーティーシア……あの女は何としても殺さねばならん……我らが『神』のためにな…！」

「奴の体内にある『無限の核』……何としても奪い取れ…！」

バークレイは漆黒のコートをバツとたなびかせ、

「いいか！奴がかの地に向かう前に叩くのだー！どんな手を使つても構わん！…！」

「はっ、全部はバークレイ様のために…！」

もう二つとバークレイの部下はスッと姿を消した。

ルシファー本部へ

-ゲルステイン帝国 -

1年前戦争によつて滅ぼされかけたがパーティーシアによつて救われた国である。

よつてパーティーシアはこの国ではちょっとした英雄扱いだ。

ただし、その英雄扱いはあくまで一般市民に留まる。

パーティーシアがこの国のウイザード組織「ルシファー」を独断で抜けたからだ。

「おう、パーティーシア」

「ぶつきらぼうにバーギルが言つ。

「なに?」

「お前、なんでこの国の組織裏切ったんだ」

「真実の探求の為…」

「真実の探求…？前言ついた終端の阻止だからてやつか…」

「そうよ、私がやらなくちゃいけないことが見つかった、だからや

めたの

そう言つとパーティーシアはバーギルの方を振り返り、

「この際だから教えてあげるわ、この国のウイザード組織『ルシフ
アー』について」

「あんなあ、俺は貴様とつるんでる訳じゃないんだ、内輪もめの話
なら遠慮するぜ」

「黙つて聞きなさい、ルシファーの存在意義は『神』の光臨にある
わ」

「…神？はつ、いかにもウイザードの連中が考えそうな宗教的なこ
とだな」

ピッヒとパーティーシアは人差し指をバーギルの口元に添える。

「彼らの神、名はその組織名の通り『ルシファー』、そしてその復
活に必要なのが…」

「『『無限の核』』^{ヒターナルコア}よ」

パーティーシアは左手を自分の胸に持つていき、

「『『ヒターナルコア』は私の中に存在しているわ

「…はあ？」

「私は生まれ持つて作られたウイザード『サタン』なのよ

「作られた・・・？」

「そう、私に親はない、試験管の中で生まれ生まれながらにしてルシファーの一員だった」

「そして神『ルシファー』復活のための道具なのよ」

バーギルは面を喰らつた顔をした。

そして同時に納得もした。

パーティーシアの底の無い魔力に・・・。

「で、貴様は自分の命欲しきに組織を逃げ出したのか」

そんなバーギルの問いにパーティーシアは右人差し指をひちひちと振り、

「神様が生まれたらまず何をすると思つ?」

「あん?」

「世界の構築?」

「なんだって?」

「つまり今ある世界を壊して新たな自分の世界を創り上げるってことよ」

「冗談にしては笑えない。

パーティーシアの顔は至つて冷静に、

「だから『ルシファー』が光臨したら真っ先に『モナー』が滅ぶでしょうね」

「なんでだよ？」

「知恵も無い、魔法も使えない、品性も無い、とバーカレイたちは考へてるわ」

「バーカレイ・・・？」

「ルシファーの最高幹部よ」

「バーカレイは『モナー』を虫けら同然だと思つてゐる…同じ人間なのにね」

それを聞いてバーギルは虫睡が走る思いをした。

「虫けらだと…ふぞけやがつて…」

「それでバーカレイは私の体内からエターナルコアを取り出して神『ルシファー』を光臨させ『モナー』を全滅させようと考へてるのよ」

「何でだよ？ 神とやらが復活したら今ある世界を壊すんだろう？ だったら自分たちだつて危ないじゃないか」

「そこまでは知らないわよ、何かあるんでしょう、ウイザードだけが生き残る方法が」

そこまで言つてパーティーシアは身を翻した。

「じゃあなんで貴様はこの国に帰つてきた?」

「復活の地を知るためよ」

「復活の地?」

「神『ルシファー』を光臨させるのに必要な場所のこと、同時にその地を封印すれば神の

光臨は避けられるってワケ」

「それどこに行けばわかるんだよ?」

「ルシファー本部よ」

「ああ…?貴様正氣か! わざわざ殺されに行くのかよ…?」

「あら、私は死ぬ気なんて更々無いわよ」

「けつ!俺は知らねえぞ、そんな危ない組織に関わつていられるか

!」

「あ、そ、いいわよ別に貴方は来なくても」

やう言つとパーティーシアはひらひらと掌を振つて歩いていった。

- ルシファー 本部前 -

(警備は3人…なんだ、意外と少ないわね…)

「 sommeil 」(眠り) 「

パーティーシアがそう呟くと警備の3人は次々と眠りに落ちていった。

- ゲルステイン帝国・宿屋 -

部屋の中をバーギルはイライラした面持ちで右往左往していた。

「…パーティーシアを殺すのは俺だ…ちつ

- ルシファー 本部内作戦参謀室 -

「え…と…復活の地、復活の地…と」

そう言いながら慣れた手つきでコンソールを動かすパーティーシア。

「出た、ビンゴ」

空中に立体的に文字が浮かび上がる。

『復活の地… ハーテンは東にあり』

(東つて… これだけの情報しかないの?)

「地図検索、ハーテン」

『該当情報なし… 検索エラー』

その時、後ろから声がかかった。

「久しい顔だな、パーティーシア、探し物は見つかったか?」

パーティーシアは、はっとして後ろを振り返る。

「ロンド…」

ロンドと書かれた黒髪の男はそっと眼鏡を持ち上げた。

「それにしても贅が皿ら来るとはな、君はもつと賢い女性だと思つたんだがな』サタン』?』?

「私と一戦交えよつていうの?』ウリエル』

「そりや君を殺して無限の核を抜き出せばバークレイ様もお喜びになるからな』

くくとロンドは喉を鳴らし、

「だが君とサシで戦うなんて無謀なことはしないぞ、出でこお前達」

ロンドが合図を送ると5人、そろそろヒューズークが出てきた。

「ああ、殺させておくれ』サタン』」

そう言つてロンドが杖を抜く、同時に他の5人も。

と、その時、更に後ろの方から声がした。

「悪いがそいつを殺すのは俺の役目でね、お前らへボウイザードなんかにやられてやらないよ」

声の主はバーギルだった。

「バーギル！ 来ちゃダメよ！ 雑魚5人はともかくロンドは他のウイザードと同じ扱いしちゃダメ！」

「珍しく慌てるじゃないか、パーティーシア」

そう言いながら長剣を抜くバーギル。

「邪魔な『モナーだ…下等生物の分際で、このルシファーまで来るとは…ね」

「んだとこり、俺はパーティーシアとの決着をつける前にあいつが勝手にくたばるような真似をさせないだけだ」

「ファイアボール」

バーギルの言葉を完全に無視してロンドは魔法を唱えた。

大きな大きな炎の塊がロンドの前に広がっていく。

(なんだ!?これがファイアボールの大きさかよ!…?)

「死ね、コモナー」

ボンツと音を立てバーギル目指して炎の塊が飛んでいく。

(ちいい…避けきれねえ…!…)

「ムーブメント!」

パーティーシアの声が跳ね上がる。

同時にバーギルの体は瞬時に1人の魔導士の横に移動した。

「へつ…余所見してんじゃねえよ!」

ズバツ!

一閃。

魔導士の1人が床に崩れ落ちる。

と、同時に壁に炎の塊がぶつかる。

炎の塊は壁の沸点を楽に越えて壁を蒸発させた。

ロンドはパーティーシアを睨みつけた。

「信じがたいな……君ほどのウイザードがコモナー一人助けるなんて助ける? 気のせいじゃないの、ロンド、私はバーギルと決着をつけてない、それだけよ」

「決着? ウィザードとコモナーが戦つて決着一つ、つけられないのか、こりゃ傑作だ!」

「何言つてるのよ、今そのウィザードの1人がそのコモナーにやられただじゃない」

「それは君が『座標移動』を使って不意打ちに成功したからだろう?」

ロンドは眼鏡を上げなおすと、再び杖をかざす。

「どうやら君を買いかぶつていたようだな、君一人殺すのなら僕1人で十分だ」

さう言つとロンドは詠唱を始めた。

「C'est intervalle de l'espace
un courant de temps (時の流れよ、空間の狭間よ)」

地面が激しく揺れ始める。

「ちひ、おこパティーシア！奴は何おっぱじめる仮だー？」

「空间湾曲…どうやら自分自身と私を異次元に移動させる仮ね」

「Un espace - temps ne vous tente pas dans la surface courbe? est est maintenant nouveau (今時空は一つとなりて新たなる曲面へと誘わん)」

「一度良いわ、私はロンドをなんとかするからあなたは残りの雑魚を頼むわね」

「勝手ほぞこでんじやねえぞー。」

「決着…つけたいんでしょ？」

そうパティーシアが言ったところでロンドの詠唱が完成した。

「ハーベースパス」

ぐしゃっとロンドとパティーシアが円を描いて曲がり消えてった。

「ちひ…くたばんじやねえぞー。」

バーギルは長剣を構えなおす。

残った4人のウィザードに向けて。

「俺も…決着をつけるまでは死なねえー。」

バーギルは吼えた。

- ? ? ? -

「ふふふ…どうだい？僕の異次元空間は」

パーティーシアとロンドの周りは何もなくただ灰色の空間だけが広がっている。

「悪趣味ね」

パーティーシアは肩を竦めるとそう言った。

「おや、お気に召さなくて残念だよ」

そういつひとロンドは杖を構える。

「ここが君の墓場となるのに…ね！」

そういつひとロンド「ウー」と音を立てて炎の塊が杖の先端から迸つた。

「グレイスバックラー！」

パーティーシアは咄嗟に唱える。

巨大な氷の盾がパーティーシアの目の前に現れる。

炎と氷がぶつかり合い、相殺し蒸氣となつて2人の間を飛び交つた。

「驚いたかいー。」**ヒ**は僕の庭、**ヒ**では僕は魔法の詠唱など必要な
いんだよー。」

「ぐつ…」

「しかし流石だね、**ヒ**では他のウイザードは力を制限される、や
れで僕のファイアボールと同等とはー。」

「**ヒ**のくらこ丁度いいハンデよー。フレーマー。」

音速の光がロンドに向かつて飛ぶ。

しかしロンドは杖を傾けるだけで田の前に障壁を発生させた。

「…」

「見えるかい？リフレクションだよ」

「ムーブポイントー。」

はね返った光を座標移動で避ける。

「ははっ、楽しいなあ同胞ー。」**ヒ**の『ウリヘル』ロンドとやら
あえるのは君くらこや『サタン』。」

「同胞なんて笑わせるわー。同じ試験管ベイビーってだけじゃないの
ー。」

「同胞だろ！？『創られた者』同士潰しあう、バークレイ様もさぞお喜びになるだろう！」

「その減らす口…一度と呑けないよひしてあげるわ

「君が死ぬからかい！？」

そう言つヒロンドは杖を振る。

五角形の図形が空間に浮かび上がりそれぞれの頂点から光の弾が飛ぶ。

「ルツト モイ…ムーブポイント」

パティーシアの体が6つに別れ、そのうち1つだけが座標移動で空間を転移する。

光の弾は5つの分身に当たり閃光と共に破裂した。

C'est un ? clat de lumi?re ent
err? dans le tonnerre moulu po
ur donner le jugement ? (審判を下す雷
よ地に埋められし閃光よ)

Lame . . . je de la lumi?re ne
d?truis pas maintenant d'enne
mi (今、光の刃となりて我が敵を討ち滅ぼさん)

「遅いよー」

ロンドは振り向きそのままファイアボールを3発連続で発射する。

「ピック フレー!!アー！」

パティーシアがファイアボールに向かつて杖を振る。

地面から光の刃が無数に連なりファイアボールを砕きながらロンドへと迫る。

「ふんー！」

しかしロンドはいとも簡単に座標移動で避ける。

「ディスパーションー！」

パティーシアが唱えたと同時に光の刃が無数の流星になつて四散した。

「なつー!??」

流星の一つかまとめてロンドの右胸に決まる。

「ぐはっ！」

「詠唱破棄が出来るくらいで勝てると思ったのかしら?」

ロンドの右胸から血が止まらない。

「くそ……魔法に魔法を融合せらるなんて……」

「止める、やめなロンド」

瞬間、空間が捻じ曲がった。

「今日は素直に負けを認めよつ、だがこのまま無様に終わる僕じゃ
がない」

「空間湾曲…？これも詠唱破棄出来るつてこのーー？」

「今度あいまみえる時があればそれが君の最後だよ、覚えておくが
いい」

ぐこやつと曲がる空間と消えてくロンドを見るパーティーシア。

「捨て台詞が3流ね、ロンド、でもいいわ覚えといてあげる」

空間が消滅するとそこにはズタボロに座りこけたバーギルと5人
のウイザードの死体があった。

「…みつ…奴は…？」

「逃げられたわ」

言いながらパーティーシアは治癒の魔法を詠唱した。

バーギルの体がみるみる癒されていく。

「行くあては見つかったのかよ？」

「行くわよ」

「東…とりあえずそれだけよ」

「東…か、メサイア共和国があるな」

「じゃ、とりあえずそこまで行きましょ」

そう言つとすたすたとパーティーシアは歩き出した。

「あ

突然バーギルの方に振り返るパーティーシア。

「なんだよ？」

「あ、ありがとう…来てくれて」

「あ…？な、なに言つてんだ貴様！忘れたのか！

貴様は俺が殺すんだ！それを横取りされたくなかっただけだ！」

「でも貴方が来てくれなかつたら、私は多分殺されていたわ、

6対1、ましてやその内1人がロンドクラスだと他の5人の相手は出来ないもの」

「…ちつ…もうどうでもいいぜ、それよりメサイア共和国だろ」

「そうね」

やつひとつ漆黒のコートを翻し、またすたすたと歩き出す。

「あ…決着がつしまで…おひやりあ

そうバーギルが小さな声で呟くとパーティーシアを追つて歩き出した。

Hターナルニアの秘密

-メサイア共和国 -

国民の数が20万を超える大陸第2位に位置する国である。農産業が盛んで他国への輸出も行われている。

また、農産業をウイザードの魔法で行っているのも大きな特徴だ。

そのメサイア共和国の入り口にパーティーシアとバーギルはいた。

「うーん…ひつさびさの大きな国ね」

そう言つと大きな伸びをするパーティーシア。

「HリードHリーンの情報を集めるのか?」

腕を上げて伸びをしてるパーティーシアにそうバーギルはたずねた。

「そうね…」

そうパーティーシアが続きを言おうとしたところでパーティーシアの顔つきがげっと変わった。

バーギルがどうしたのかと尋ねようとするが、遠くからこづりくと近づいてくる足音が聞こえてくる。

近づいてくるのはポニーテールで黒髪の少女。
見た目14・5歳だらうか…

漆黒のマントを付けていたヒルダを見ると、この少女もウイザードのようだ。

「おねーさまー」

ぱふっとパーティーシアの胸に飛び込む少女。

「ク…クレシス…？な…なんでこんな所に…」

クレシスと言われた少女はパーティーシアの胸に顔をしきつつけながら

「あら、お姉さま、私はこの魔法師団一一番隊隊長ですよ、お忘れですか？」

「う…迂闊だったわ…すっかり忘れて…た…っては・な・れ・な・さ・い・よー！」

ぐぐぐとクレシスの頭を両手で離すパーティーシア。

「い…いや…です…お姉さまと会うの何年振りだと…思ってるんですけど…」

ぐぐぐとクレシスは頭に力を入れまたパーティーシアの胸へと持つていく。

「おい、パーティーシア…ここは誰だ？」

バーギルが呆気にとられながら話す。

その声にクレシスがギロッとバーギルを睨みつけた。

「お姉さま……？誰ですか？」の野蛮そくなコモナーは、仮にもお姉さまの名前を呼び捨てにしたようですが……

「あ……ああ、こいつはバーギル、赤髪のバーギル、聞いたことがあるでしょ？」

「赤髪のバーギル？ああ、コモナーのくせに結構強いとかいう傭兵ですね、で・も」

クレシスがパーティーシアから離れバーギルへと近づいた。

「なんで貴方、お姉さまを呼び捨てにしたかがコモナー風情が」

「けつ、俺がパーティーシアのことを何と呼ぼうが勝手だらうが

ふいっとバーギルはそっぽを向いた。

「いいえ、いけないわ、お姉さまに對しての侮辱……と捉えますよ」「何といわれようとも變えるつもりはない」

バーギルのその言葉にクレシスはひくひくとこめかみをぴくつかせた。

「いいです、その腐った根性、死んで叩きなおして差し上げますー！」

そう言つとクレシスは杖を抜く。

「テレポート」

クレシスはふっと消えるとバーギルの遙か頭上に姿を現した。

「ライティング！」

クレシスが杖をバーギルに振る。

雷がバーギルに落ちる。

その雷をバーギルは避けた。

「私のライティングを避けるとは…中々やりますわね、『モナー風情が…！』

「グラヴィオン」

「え？」

パーティーシアの詠唱が聞こえたと同時に飛んでいたクレシスが地面へと落ちた。

「きやあー！」

そのクレシスをバーギルが両手で受け止める。

「な…は…離しなさい…『モナー風情が…お姉さまも何故とめるんです…！』

「離しなさいつたつてこのまま落ちたらお前死んでたろ？が…」

「私があの程度の高さから落ちたくらいで死ぬのですか…いいから離しなさい…！」

クレシスはドンッと両手で思いつきりバー・ギルを突き放した。

「クレシス、ここはとつあえず私の味方よ、やめなさい！」

「えーー！お姉さま、こんなゴモナーとお付き合つ…げぶつ…」

クレシスの言葉が最後まで続く前にパーティーシアのグーのパンチがクレシスの顔面に直撃した。

「私は味方だつて言つたの、誰がこんな奴と付き合つてるつて？」

「けつ、俺の方がお断りだ！」

「ふん、それは大変嬉しい言葉ね」

2人はにらみ合つてふんつと互いにそっぽを向いた。

「で、そいつは誰なんだよ？」

「クレシス・レイルモンド、私の一番弟子よ」

（ふむ…とりあえずお姉さまといつは憎からずも遠からず…といつたところ…なら…）

「はじめまして、モナーさん、私、クレシス・レイルモンド、1

4歳、お姉さまの一番弟子兼恋人です

「だ…誰が恋人よ！」

パーティーシアが怒鳴る。

「はあ？なんだ、変態か、お前」

「く…変態…？」

ひくつと口が動くクレシス。

「あのねえ、バーギル！クレシスは私の一番弟子…それ以上でもそれ以下でもないの！」

「いやです、お姉さま、あんなに愛し合つたではありま…ぶべつ」

クレシスの台詞が最後まで続く前にまたもパーティーシアのグーのパンチがクレシスの顔面に飛ぶ。

「さ、こんな子、放つとして宿へ行くわよ、バーギル、その後情報収集」

「あ…ああ」

「ああ、お姉さま…ま、待つて～」

「じゃあ、お姉さまたちはルシファーの復活を阻止するためには、情報を探しているんですね？」

「そうこう」と、だからあなたに構つてゐる暇はないのよ

どんとクレシスは自身の胸を強く叩いて胸を張る。

「そうこうとならお任せください、お姉さま！」

私が魔法師団の方に情報を提供するよう働きかけます

「ルシファーのデータベースにも無かった情報が一ウェザードが知つてゐわけないと思つたんだな」

バーギルが胸を張るクレシスに冷めた目線を向けて言い放つ。

その言葉にまたひくつとめかみをひくつかせるクレシス。

「『モナー…あなたは…』、言葉が多いですね」

「本当のことだ」

「ふん、まあいいです、役に立つかどうか、そこに座つて見てなさい」

やう言つてクレシスはパーティーシアの方に振り向き小さくお辞儀する。

「それではお姉さま、また後ほど……」

「テレポート」

「ううクレシスが唱えるとふつとクレシスの姿が消えた。

「で…俺たちはどこから当たるんだ？」

バーギルが消えたクレシスの場所を見ながら呟いた。

「そうね、エーテンの事だから…まあ一般市民は知らないでしょうし

…」

手を顎にあて、うーんと首を捻る。

「国王に、会つてみましようか」

「はあ？ 貴様アホか、仮にも一国の国王がそう簡単に会つわけなか
りう」

呆気にとられた顔をしたバーギルにちつちつと指を振るパーティ
ーシア。

「私を誰だと思つてゐるの、バーギル」

「アホ女」

「クレシスじゃないけど…口の減らない男ね…まあ、いいわ、付いて来なさい、すぐにわかるから」

「うう言つてパーティーシアとバーギルは城の方へと向かつた。

-メサイア城・門前-

「はーい」

門番に向かつて軽く手を振るパーティーシア。

「パ…パーティーシア様！」

「お久しぶりです！」

門番の2人が慌てたように敬礼をする。

「おこおこ…どうなつてんだ、」

「私はこの国で前に農産に関する魔法の手解きをしたことがあるのよ」

パーティーシアはそう説明すると門番に

「メサイア国王はいるかしら？」

「国王様ですか、もちろんござります」

「会える?」

「暫くお待ちを…」

そう言つて門番は足早に城の中へと入つていぐ。

5分後…

「お待たせしました、国王様がお会いになります、謁見の間へどうぞ」

「ありがとうございます、さ、行くわよ、バーギル」

「あ…ああ」

スタスターと歩き出すパーティーシアに驚きを隠せない様子で付いていくバーギル。

2人は謁見の間へと入つていった。

メサイア国王、本名をグラガンドル・キューシャ・メサイアという。

御年65歳。

白髪に立派な白髪。

精悍な顔立ちは一国王としての威厳を十分に放っていた。

「お久しぶりです、グラガンドル国王閣下」

そういうと膝をつき、礼をするパーティーシア。

「おお、パーティーシア、久しいの、ルシファーに狙われていると聞いて心配しどつたが…」

「お気遣い感謝いたしますわ」

「そなたはこの国の恩人じや、そつ堅苦しい挨拶などいらんわい…」

で、用件はなんじやな？」

「Hītān... といつ地名を」存知ないかと」

「ふむ... Hītān... か...」

グラガンドルの眉間に僅かにしわが寄る。

「確か『神』が光臨する土地... じゃつたかな」

「その通りです」

「Hītānは」」メサイアより更に東の土地にある」

「東... といつのは知りてあります」

「ふむ、もつちよつと詳しく述べつかの...」

「」」のメサイアより東へ 120km... そこには遙か天空に Hītān がある...」

「といつに伝えが家伝として残つてい」

「天空...?」

「『神』が光臨する土地じやて... 普通にはない場所なんじやうつな...」

「で... 行く方法は...?」

「無い」

「… そうですか… いや、場所が分かつただけも有難かったです」

「エデンへと赴いて何をする気じや？」

「『神』を封印します」

凛とした眼差しでパティーシアは言った。

「『神』の封印にはエターナルコアが必要じや… それが意味すると
ころを知つて… 言つておるのか？」

「はい、それが私に『えられた』『運命』ならば… その覚悟は… もう
出来ています」

「おい、どうこいつ意味だ…？」

バーギルは会話の意味がよくわからず堪らず質問した。

「『神』は光臨するにしても封印するにしてもエターナルコアが必
要不可欠なのよ」

「ああ？ それって貴様が死ぬつてことじゃねえのかー…？」

「そうよ」

「さうよ… つてお前…」

「時間が惜しいわ… 行くわよ、バーギル、国王陛下、失礼します」

「うむ……」

「お、おこ……」

スタスターと歩いて謁見の間に出てるパーティーシアを呆然と見つめるバーギル。

「その方、傭兵「赤髪のバーギル」じゃな？」

「……は……はつ……」

グラガンドルに問われ思わず背筋を伸ばすバーギル。

「あの子は……本気じや……それまでの間、守つてやってくれぬか？」

「……ホントに封印したら、あいつは死ぬんですか？」

「……十中八九、逝くじゃうな……」

「……」

ぎりりと歯をかみ締める音が謁見の間に広がった。

「……ルシファーは新しいエターナルコアを持つ試験管ベイビーを製造中と聞く……

猶予もないのもまた事実なのじや……」

「そうだ！それが完成したらそいつを奪つて封印すれば……！」

その案にグラガンドルは静かに首を横に振る。

「それせきりとあの子が許せんじゃね……同じ試験管ベイビーとして、利用されるための存在として産まれるもののが自分の代わりになるなど……優しいあの子には耐えられんのじや……」

「だからってーあいつが死んで、それで終わりなんて」と……あつてたまるか……！」

「主の気持ちも分かる……があの子の覚悟は本物じや」

「…………」

へぬつと国王に背を向けるバーギル。

「そんなこと……認めねえ……絶対に他の方法を探し出して見せん……国王様……俺はパーティーシアを死なせない……あいつを殺すことができるのは……俺だけなんですよ……

それ以外でのあいつの死なんて……俺は絶対に認めない……」

そう言つてバーギルは走つてパーティーシアを追いかけた。

もう一人のエターナルコア

- ルシファー・魔法実験棟第一施設 -

バークレイとロンドは一つの試験管を眺めていた。

試験管の中には一人の女性。

金髪のロングヘア。

見た目は17～8歳くらいだろうか。

「見たまえ、『ウリエル』、これが新しいエターナルコア、『ミカエル』だ」

そう言つてバークレイはニヤリと笑う。

「はつ、バークレイ様、これで『サタン』は用済み…いつ処分してもいいという訳ですね」

続いてロンドも笑う。

「そういうことだ…『ウリエル』よ、『ミカエル』を連れて『サタン』を殺せ」

カツと外に稻妻が走る。

「奴は今、メサイア共和国にいる、行け、『ウリエル』よ…」

そう言つてバークレイはロンドに命じた。

「はーーー！」

「ぽぽっ……とこづ音がして試験管から泡が吹き出た。

・メサイア共和国・宿屋【紅の坂月】・

「お姉さまー有力情報、ゲットですー！」

城から帰ってきたパーティーシアとバーギルをぱあっとクレシスが迎えた。

「お姉さま、エデンは東に120km、遙か天空にあり！です！」

「あ、それ、もう知ってるわ」

ガーンという音を立ててクレシスの頭にタライが落ちてきた。ような錯覚がした。

「ばーか」

続けて言われるバーギルの言葉にひくつとクレシスの口がゆがむ。

「…コモナー…あなたはいつもいつも…、多いんですー！」

「ファイアボール！」

クレシスの杖から炎が飛び出す。

バーギルは長剣を素早く下から切り上げ炎を切り裂いた。

「おい、小娘…俺は今、むしゃくしゃしてるんだよ…手加減できねえぞ…」

ギンツとバーギルはクレシスを睨みつけた。

「丁度いいです、あなたには今、ここでお仕置きをしてあげます！」

クレシスも杖を構えなおす。

と、そこでピクリとクレシスの動きが止まった。

（何…？）の波動…お姉さまと…同レベルの人間が近づいてくる
…？

パティーシアもバンツと勢いよく窓を開けた。

（この波動…まさか…）

「クレシス！逃げなさい！」

「お姉さま…この波動は…」

2人の会話についていけないバーギルはキヨトンとしていた。

「バーギル！ 戦闘体勢！ ロンドが来るわよ！」

「ロンド… ハルシファー内で戦つたあいつか…？」

「そうよ…『ウコホール』ロンド… でもそれだけじゃない…」

パーティーシアの言葉にクレシスが窓から身を乗り出す。

「お姉さまの波動を感じる… まさか…」の感じは… まさか…」

「ええ、クレシス、ビリヤー… 産まれたようね… もう一つのエターナルコアが…」

その言葉を聞いてバーギルも身を乗り出す。

（もう一つのエターナルコア… そいつを手に入れてしまえば、こいつは死なずに… 済む…）

バーギルはじっとパーティーシアを見つめた。

「な…なによ」

「いいか、お前は俺が殺すんだ、それまで絶対に死ぬなよ、パーティーシア」

バーギルはクレシスの方を見る。

「おい、小娘、一時休戦だ、敵を俺とお前とで迎え撃つ」

そんなバーギルにクレシスは少し驚いた顔でしたが、すぐにふふ

つと笑い、

「ここでしょひ、やあ、お姉さま、こりは私たちに任せ、お姉さまはHテンへとお越あがだわー」

「な…そんなこと、出来るわけ無いでしょーつー」

「お姉さま、お姉さまは自分の一番弟子が、信田できなーんですか？」

？」

ぐこっと迫るクレシスの顔に一瞬たじろぎを見せるパティーシア。

「た…確かにあなたは強いわよ、だけどそれはあくまで普通のウイザードとして、試験管ベイビーと同格つてことば…ありえないわ」

「『サタン』であるお姉さまの一一番弟子である私が『ウリエル』ごときに遅れをとるといつのですか?」

「わーみー

ふふんとクレシスは鼻で笑つた。

「甘く見られたものですね、お姉さま、私はお姉さまの一一番弟子なのですよ?」

もつと自分に自信を持つといつのです

「でも…ー」

「小娘の言つとおりだ、パーティーシア…悪いが今回、貴様の出番は

ないぜ」

「バーギル！貴方まで…！」

そう、パーティーシアが叫んだとき、『ウツ』と風が吹いた。

「来ますわよ、『モナー、ぬかるんじやありませんよ』

「けつ、小娘こそな」

風の後方から巨大な火炎弾が5発、迫ってきた。

「ミユラー！」

クレシスが叫ぶ。

同時に宿屋の前に巨大な障壁が姿を現した。

障壁にぶつかり、次々と火炎が粉碎される。

「ふん…あれはクレシス・レイルモンドか…」

ロイドは防がれたファイアボールを見ながら呟いた。

「いいか、『ミカエル』、俺があの小娘を殺す、お前は『サタン』を殺せ、必ずだ」

ロイドの後方でフードを被つた金髪の女が小さく頷いた。

「ああ、それと邪魔な『モナー』も一人いるはずだ、そいつも消せ」

「御意…」

金髪の女『ミカエル』はそういうとスッと姿を消した。

「フローテイン」

クレシスが唱えるとふわっとバーギルとクレシスの身体が浮かぶ。

「では、悪者退治と洒落こみますよ」

「ああ…」

びゅっとクレシスとバーギルがその場から飛んだ。

「ま、待ちなさい…あなたたち…！」

パティーシアが慌てて追いかける。

しかし、さうじょうとした瞬間、びくつとした。

(何か…いる…)

ぱつと後ろを振り返る。

そこには金髪の女がいた。

(「の波動…間違いない…この子だわ…」)

「バーカレイ様の命により…貴方を始末します…『サタン』」

そう言つと同時に杖を出す。

場の緊張感が一気に高まつた。

「…」

キキッと急にクレシスは立ち止まつた。

(「の波動…しまつた…！」)

「どうした? 小娘」

急に空中で身動きが取れなくなつたバーギルはクレシスの方へと振り返る。

「お姉さまの方からエターナルコアの波動が…！ロイドは陽動です！」

「なんだと…！？」

『せつひ…と歯を食こしちゃる。

「『モナー、貴方を今からお姉さまの元へと飛ばします…ロイドは私が全力で止めますから、お姉さまを助けてあげてください』

「小娘…お前…」

「ムーブポイント」

クレシスがバーギルに座標移動の魔法を唱えるとバーギルはすっと姿を消した。

(頼みましたよ…『モナー』)

「「フーン＝ア」」

一いつの閃光がぶつかり合って衝突する。

両者の力は全くの互角だった。

「貴方の名を…聞いておいたかしき…？」

「『カエル』…それが私のコードネームです…『サタン』」

そう言つたミカエルの頭上にふつとバーギルが現れた。

「おおおおおーー！」

そのまま勢いに任せバーギルはミカエルに向かつて長剣を振り下ろす。

「ミコーラ…」

ガギイイイイン！

バーギルの剣はミカエルの頭上で障壁に阻まれた。

「貴方が『ウリエル』の言つていた邪魔なコモナーですね…命により貴方も消去します」

「ちいいいい！」

すつと杖をバーギルに向ける。

「フレーミアー！」

パティーシアの声が飛び。

閃光がミカエルを包む。

ボウつという音と共に煙が立ち込める。

煙を切り裂いてミカエルがパティーシアに向かつて突っ込む。

そのままミカエルはパーティーシアの腹に蹴りを入れようとした。が、

パーティーシアはその瞬間、上に飛び、ミカエルの頭を掴み、上半身を捻るようにして後方へと着地した。

「ピック フレー ミア」

ミカエルが唱える。

「がつ……！」

横の方からミカエルに接近していたバーギルの下から光の刃が連なりバーギルの身体を貫いた。

「バーギル！」

「こんな……ものお！」

グンッと足に力を入れてそのままミカエルに突っ込むバーギル。

「消えなさい、コモナー！」

杖を構えたミカエルの横にムーブポイントでパーティーシアが姿を現す。

そのままパーティーシアはミカエルに飛びつき、2階の窓から飛び降りた。

「邪魔な…やはり貴方から消えてもらいます、『サタン』」

「『ミカエル』、貴方の産まれて来た意味…知つてるの?」

ぴくっと僅かにミカエルの眉が上がる。

「私は神・ルシファーの贊です、あなたと同じ」

「そうね…でも貴方が産まれて来たのはそれだけじゃないわ、必ず意味があるの」

「…意味?」

「そうよ…貴方は道具なんかじゃない、自分で生きる権利がある」

「…そんなもの、私にはありません、私は贊ですから」

ぱつと杖を振るミカエル。

「私には貴方や『ウリエル』のように本名も『えられていない…なぜなら、私は贊だから…!』

「フレーミア」

「ミカエル」

ミカエルの唱えた閃光がパーティーシアの障壁によつて遮られる。

「『カエル』…なら、私が貴方に名前をあげるわ…だから、貴方は貴方の意思で、生きなさい。」

「……！」

ミカエルにかすかに驚きの表情が混じる。

「…そんなもの…必要ありません！」

「ファイアボール！」

「ムーブポイント！」

ミカエルの放った炎、いや、もはやマグマの塊だろう。

それを座標移動で避けるパーティーシア。

「はあ…はあ…」

「へへへ…よく持つ、クレシス・レイルモンド…」

「まだまだ、これからです！」

バッと杖をロイドに向けるクレシス。

「「ファ イアボール」」

ガオオン！

一いつの炎の塊がぶつかり、空中に火の粉が四散する。

「くつくつく… やるねえ、たかが一ウェザードがこの『ウリエル』と互角のファ イアボールを打ち出すとは」

「死んでも貴方は、ここから通しません！」

「ああ、問題ないよ、僕が直接手を下さずとも『ミカエル』が君の愛する『サタン』を消すからね」

「…それも…事前策は打つてあります」

「例のコモナーか？く… ただのウェザードならともかく相手はエターナルコアを内包した『ミカエル』だぞ？」

「そうですね… ただのコモナーなら、返り討ち… でしょうが…」

バッと杖をロイドに向けるクレシス。

「生憎、あのコモナー、ちょっと普通じゃないんですよ…、フレー

ニア…」

閃光がロンドを襲う。

ロンドは飛翔し、それを避ける。

閃光と炎がぶつかり合い、激しい魔力同士が衝突した。

「「ファイアボール」」

パーティーシアとミカエル、2人のマグマが激しくぶつかり合ひつ。

(…今だ!)

ミカエルの集中がパーティーシアに向いているその瞬間をバーギルは見逃さなかつた。

2階から飛び降り、一気に間合いを詰め剣でミカエルの杖を叩き落とした。

「あ…！」

そのまま後ろからミカエルを羽交い絞めにする。

「よう、お前、ホントにそれでいいのか！？」

「な……なにがです……？」

「ホントにルシファー共の道具でいいのかって聞いてんだよ！」

「当たり前です、私はそのために産まれたのですよー。」

「こ……馬鹿野郎が……！」

羽交い絞めを解いて、そのまま力任せにバーギルはミカエルを殴り飛ばした。

「どんな理由があろうとも、「道具」として産まれた奴なんてこの世にはいねえんだよ！」

一歩、一歩、バーギルはミカエルに近づく。

「ましてや、『運命』なんて言葉で片付けて、勝手にくたばるなんて、そんな都合のいい話、許せるわけないだろ？が！」

その言葉はミカエルではなくパティーシアに向けて放たれた言葉だった。

少なくともパティーシアにはそう聞こえた。

「…………バーギル」

「ミカエルさんよ……お前とパーティーシア、2人で力を合わせて『神』
とやらを封印すれば……

この世は安泰、2人とも無事生き残るんじやねえのか?」

「な、なにを馬鹿な！私の悲願は『神』ルシファーア様の光臨です！」

「それはお前の悲願じゃねえ、ロンドやバークレイ達の悲願だろ？
が！」

バーギルはぐつとミカエルの胸ぐらを掴み持ち上げる。

「新編」古今圖書集成卷之二十一

世界を救うことか！？それとも世界を壊すことか！？」「

キンツヒミカエルの中央に無数の光が集まっていく。

「バー・ギル！離れて！」

パーティーシアの叫びとほぼ同時にバー・ギルの体が吹っ飛んだ。

「はあ……はあ……邪魔だ……貴方たちは私の思考回路をおかしくする……」

ミカエルは頭を抑えながらよろよろと立ち上がる。

「次…次会うときは必ず消します…『サタン』、それに私を惑わせ

「モノ」も「も

やつこつとミカエルは光と共に姿を消した。

「…」

ロンドの後のミカエルの姿が現れた。

「『ミカエル』…『サタン』は消したのか?」

「すみません、『ウリエル』…私の思考回路が…おかしく…なつてしまふ…」

(…少し早く動きすぎたか…)

ロンドは杖を下げる。

「帰還するわ『ミカエル』」

「は…」

やつこつとロンドとミカエルは光に包まれてその場から姿を消した。

それを見てへなへなと地面に膝をつけクレシス。

「はあ……はあ……流石に……愈いれし者を……相手にするのは……疲れますね……でも……」

クレシスは空を見上げる。

「あのゴモナー……やつぱつ……守ってくれたんですね……」

セツニツヒトクレシスは眩しそうに眼を細めて微笑んだ。

Hikinbe no torii

- ルシフラー・魔法実験棟第一施設 -

「くくく…はーつはつは…見よ、『ミカエル』ーの『ウリエル』の姿を！完成だ、完成したのだ！」

『サタン』を超える逸材が！遂に…！」

バーグレイは試験管に眠るロンドの姿を見ながら高らかに笑った。

ミカエルはそんなロンドの姿を黙つて見続ける。

背の片方に純白の翼、もう片方に漆黒の翼。

トレードマークであつた眼鏡もしていなく、薄気味悪く光る銀色の目。

ロンドのその姿に前の面影はどうにも残つていなかつた。

- ハーデン・直下地上 -

パティーシアとバーギル、そしてクレシスはエデンに「跳ぶ」方法もわからぬままここへとやってきた。

クレシスは自分の部下を10名ほど従えて来ている。

クレシス曰く「私の優秀な部隊です、どうやらのゴモナー一人より

もよつぽど頼りになりますよ」

と黙つて無理やり同行させたのだ。

パーティーシアは団体行動が苦手である。

基本的に自分のことは自分一人でなんとかしたい性格なのだ。

なのに事あるごとにクレシスとその部下たちは何かと世話を焼いてくる。

クレシスの部下たちにとつて耳タコのようにな聞かされていた「お姉さま」の存在は正に神だった。

今もそれは例外ではなく瞳をキラキラさせながらパーティーシアの言葉を聞こうとしている。

はあ…と溜め息をついてパーティーシアは言葉を紡ぎだした。

「さて…この真上にエデンがあるんだけど…どうやって跳んでいけばいいのかしらね」

「パーティーシア様！ムーブポイントでは跳べないんですか？」

「残念だけど、私のムーブポイントの距離は50km、それも1人の時でね、

あなたたち全員で跳んだら20kmくらいで打ち止めよ

「なら、跳んだ直後にまたムーブポイントで更に上に上がれば…」

「エデンに着いたときに封印するだけの力が残つてなきゃ意味無い

でしょ、それに対外敵用シールドが張られているかもしないし

「あ、そうですよね……」

わいわいとパーティーシアたちが話し合っているのを横目にバーギルは辺りを散策する。

と、地面の一部に妙な違和感を感じた。

(草の色が……かすかに違う……?)

バーギルはぶちっと色の違う草を引っっこ抜く。

その下には薄つすら紫色に光る文字が見えた。

「……何だこれ?」

「どうしたんです?」「モモナー」

クレシスがバーギルに近づく。

「これ……何だ?」

「古代術式の文字の欠片ですわね……お姉さまー。」

クレシスはパーティーシアを呼ぶ。

「どうしたの？」

「これを」

「地面に古代術式の文字……？ちょっと待って、」辺一辺一帯、燃やすわよ

ナラう言つと軽く杖を振る。

瞬間、半径500㍍の草が燃え尽きた。

「流石ですわ！お姉さま

「クレシス」、よく発見したわね

「お姉さまのためならこのクレシス、何でも発見します

「おい……見つけたのは俺……

ぱつりとバー・ギルが呴くと物凄い形相でクレシスがバー・ギルを睨んだ。

その瞳に計り知れない殺意を込めて「私が発見したことにしてないと殺します」と。

「どれどれ……ん……

地面に書かれた魔法陣を一通り眺め歩き、時には指先で触れる。

「どうやら大規模な転移型魔方陣のようね」

「『ソルジャー』にあるところ」とは…」

「その可能性は、高いわ」

そのパーティーシアの声に辺りがわっと騒ぐ。

「とりあえず今日一日かけてこれを解読、解読出来次第、エデンに
跳ぶわよ」

「はい！」

-夜-

パーティーシアはまだ魔方陣を丹念にチェックしている。

そこから数百メートル離れたところではバーギルとクレシスたちは待機していた。

「おい、小娘…」

「馴れ馴れしく呼ばないで貰いたいですね…何ですか？」

「パーティーシアの奴をエーテンに行かせて…本当にいいのか?」

ぴくっとクレシスの眉が上がる。

「私が何を言つても、もうお姉さまは聞きません、あの人はそういう人ですから」

一呼吸置き、右手を胸の前でぐつと構える。

「だから…その時が来るまで、私がお姉さまを守ります」

「俺は…そこまで割り切れねえな…」

バーギルは夜空を見上げる。

満天の星空が吸い込まれそうに辺りを包んでいた。

「あいつとは決着もつけてないし…俺以外のやつがあいつを殺すことも、ましてや自分から死に向かうなんてのも我慢出来ねえ…」

「お姉さまは世界を救うために命を懸けるんです、その崇高な目的がわからないのですか?」

「わからねえよ、どんな事情があれ、自ら命を絶つなんて最低の行為だ」

「エターナルコアっていうのは諸刃の剣でしてね…埋め込んだ人間に膨大な魔力を与える代わりに人間としての寿命をほとんど捧げるものなんですよ」

「…なんだと…！？」

バーギルの顔に驚嘆の色が浮かぶ。

「だから、お姉さんは持つてあと1～2年、それまでに出来ることは神を光臨させるか、神を封印するかのどちらかだけ」

「お姉さんは自分の人生に悔いを残さないために行動しているんです、それもわからないようなら…今すぐこの場を去りなさい、コモナー！」

クレシスの凜とした眼差しがバーギルに突き刺さる。

「…ちつ…」

バーギルはクレシスの眼差しに耐えられないかのようじろりと背を向けて横になった。

30分くらいの沈黙。

不意にクレシスが立ち上がった。

「みんな！ 戦闘準備を！ 何か来ます！ ！」

クレシスの部下たちがその言葉にざわめく。

バーギルも飛び起きて剣を手に取った。

「パーティーシアは…？」

バーギルがパーティーシアの方を向く。

パーティーシアは魔方陣の中心で呪文を唱えている。

集中しているせいかバーギルやクレシスの声が届く様子もない。

「仕方がありません、私たちで食い止めますよ・・・！」

クレシスはそう言って杖を抜いた。

（魔力探索……南東、50kmほど離れてますが……しかし何ですかこの
波動……酷く深くて暗い……）

「クレシス様！ 敵はどこから来るんですか！ ？」

「南東です、今は50kmほど離れてますが……この魔力なら……
一瞬でここに移動していくことも考えられますよー！」

「50kmを一瞬つてそんな……パーティーシア様と同じレベルの力……
？」

部下たちに動搖が広がる。

「ミカエルか……？」

バーギルが剣を構えたまま呟く。

「いえ、この波動はエターナルコアではありませんね……ただそれに匹敵するくらい強い……！」

その言葉と同時にクレシスに緊張の色が走る。

「どうした？」

「私の魔力探索に気付かれました……来ますよ……」

そう言つた瞬間、遙か南東から巨大な閃光が走る。

閃光はクレシスを狙っていた。

(大きい……ミコラじゃダメ……！)

「ムーブポイント！」

クレシスは上空へ転移して閃光を避ける。

……が、閃光は突如あり得ない方向に曲がりクレシスから逸れた。

「しまつた……！私を狙つたと見せかけて……本当の狙いは……！」

クレシスの目に映るのはパーティーシアの姿。

「全隊員…お姉さまの前に防御壁を展開…！…急ぎなさい…！」

「はい…」

「　　「　　「　　「　　「　　「　　ミコラ………」　　」　　」　　」　　」

10人分の防御壁がパーティーシアの前に展開される。

ガギイイイイイイイイイイイイ…！…！

次々と防御壁が破られ閃光は突き進む。

あと1枚、防御壁を残したところで閃光は辛くも消え去った。

一同が安堵した瞬間、クレシスの部下の1人が吹っ飛ぶ。

「あれほどのフレーミアの後にムーブポイント…？」

クレシスが驚きを隠せないよう吹っ飛んだ部下の方を見た。

そこには異形の姿をしたもののがいた。

「何ですか…あれ…」

純白の翼と漆黒の翼。

銀の瞳を宿す『そいつ』はクレシスの方を見て残忍な笑いを浮かべる。

「久しいな…小娘」

「その頃…まさか、『ウリヒル』…？」

辺りの部下たちがその言葉にぎょっとして距離を取る。

「くくく…そのままか、だ、僕は人間を超えたんだよ」

「ルシファーがまた趣味の悪い実験をはじめたんですね」

「趣味が悪い？ 崇高だと書いて貰いたいな」

セツナヒトロソグダは手を振りかざした。

風がはじけ飛ぶ。

クレシスはまともに口を開けていられなかつた。

(何ですか…詠唱していなーのに…?)

「詠唱など必要なくなつたのだよ」

ロンドはクレシスの背後に回つて立つた。

「…心まで読むなんて、悪趣味なー」といの上なーですよ

「…ふん」

ロンドはすつと手をクレシスに向ける。

刹那、ドン…といつ破壊音と共にクレシスが吹っ飛んだ。

空中できりもみしながらなんとか途中で踏みとどまる。

「今ので死なないのも凄いものだ、どうだ小娘、『サタン』の部下などやめてルシファーに来ないか?」

「…[冗談…言わないで貰いたいですねーフレー!!アーーー]

閃光がロンドに向かつて飛ぶ。

ロンドは避ける素振りも見せない。

ロンドに当たる直前、閃光はハ方に弾けて消滅した。

「へへへ…田へりましにしかならんな」

ロンドの笑いにクレシスも微笑みを持つて返す。

「元よりそのつもりですか?」

「何?」

ロンドの背後に飛び掛っていたのはバーギル。

剣を渾身の力で振り下ろす。

ズドッ!

脳天に直撃したはずの剣はそこで止まっていた。

(…刺さらねえ…だとお…!?)

バーギルはなおも力を込める。

「何を企んだかと思えば、今更コモナーワン人の力でどうにかなる僕だと思ったのか？」

ロンドはそう言つとバーギルの腕を掴み、

蟻を摘むような感じで肘を摘む

ホギイ！と嫌な音かした

モナード!

クレシスが叫ぶ。

止めだ

そこで落ちて行くハリギルに手を突き出す。」

ズオッ！と閃光が放たれた。

「誰か！ムーブポイントをーー！」

全員がバー・ギルに杖を向ける。

「ダメです…間に合いません…！」

「「モナー！」

全員がバーギルの死を覚悟した瞬間、バーギルの体は座標転移した。

「！？」

「ムーブポイント！？誰がやつたんです？」

咄嗟に地面の方を見るクレシス。

地面にはバーギルを抱きかかえるミカエルの姿があった。

邪神復活（前書き）

続き物の小説でルビ振るのつづりませんですか（^――^；）
タグが受け付けなかつたよー（、・・・、）
神と書いてルシファーと読むと良いです。

邪神復活

バーギルを両手で抱え、ミカエルが立っていた。

「…それは何のつもりだ? ミカエル」

ロンドが問う。

「今、この者たちを消去するのは得策ではありません、『サタン』にエデンへの入り口を開いてもらい、神の降臨を速やかに行つのが我々の仕事のはずです、それに…」

と、続く言葉をミカエルは止めた。

「このモモナーを殺してはいけない、と自分の思考回路が命じている…と。」

しかしロンドはミカエルの思考を読める。

ミカエルの思考を読んだロンドは怒りで顔面中の血管が浮き出しだ。

「ミカエル! 貴様、ルシファーに仇なすか!」

ぶわっと両翼が開き両手を突き出す。

黒い黒い、ロンドの心の塊のよつなどす黒い炎が掌に集まる。

「裏切り者には制裁を！エターナルコアなどもう必要ない……この僕がバークレイ様の傍にいる限り……！」

暗黒の炎がミカエルに向かつて発射された。

その炎は触れてもいらないものを燃やし、蒸発させるほどの力を持つていた。

だがミカエルは冷静にバーギルを降ろし、杖を炎へと向ける。

「ミコリ」

巨大な障壁が姿を現し、炎と衝突する。

黒い炎の塊は100以上の細かな粒子に分断され地面に降り注いだ。

「では……互いのために戦うしかないですね……『ウリエル』」

ミカエルは既にロンドの背後へと回っている。

「フレーミア」

詠唱の声に反応してロンドが手を振り払う。

巨大な閃光とロンドの振り払った手がぶつかり合いつ。

「ぐ……ぐぐうぐうぐうぐう……！」

「ディスパーション」

「…………」

ロンドの手に当たっていた閃光が四散し、流星となり横からロンドを襲つた。

「凄い……これが……エターナルコアの戦い方……ですか？」

クレシスは驚嘆していた。

自分の尊敬する人と同じ戦いをする者に。
それはクレシスの部下たちも同様だった。

濛々と噴き上げる煙幕からロンドの腕がミカエルに向かつて伸びる。

ミカエルは支点だけをずらし、その腕を避ける。

そのまま杖を腕に押し当て詠唱を行う

「ファイアーボール」

零距離でマグマがロンドの腕を直撃した。

…が、ロンドは怯まない。

ドロドロに融けた腕はそのままに半身を捻り、ミカエルの体に蹴りを加える。

「……！」

エターナルコアを内包するパーティーシアやミカエルは何も唱えてなくとも強力な「魔法障壁」が絶えず体を守っている。

そのことが幸いした。

吹き飛ばされ、脇腹に痺れを感じながらモリカエルは空中で静止する。

「とんでもない力ですね…『ウリエル』…」

「僕の方こそ褒めてやろう、ミカエル…この姿になつた僕にこままでダメージを与えるんだからな、流石はエターナルコアと言つた所か」

「だが、それももう終わる」

ロンドが力を込める。

大気が震えて、世界全体が脅えるような魔力がロンドの中心に渦巻いた。

「僕の本気を受け止める覚悟があるか…？」

「やっと笑い、ロンドが残った片手を突き出す。

「容易い挑発ですね、『ウリエル』、そのような事を私が受け入れるとでも…？」

「よおく、位置関係を見てものを言つんだな、ミカエル、後ろを見てみる」

ミカエルはロンドの言葉にちりりとだけ振り返る。

そこには氣絶したままのバー・ギルがいた。

「魔力のないゴモナーの居場所にまで氣が回らなかつたなあ、どうする？

「いつを避ければそのゴモナーが消滅するぞ？死んで欲しくないんだよなあー？」

ミカエルは杖を構えた。

「ならば…本気の一撃とやひ、受け止めるのみです…！」

「あの嘘、ちょっと混ぜてもいいわよ

転移方陣の方から声がした。

さつきまで何にも目をくれず呪文を詠唱し続けていたパーティーシアが放った台詞だった。

地面の方陣の輝きが数倍に膨れ上がっている。

「『サタン』……やはり邪魔をするか…！」

ギリギリと歯を食い縛り、パーティーシアを睨みつけるロンド。そしてパーティーシアの心を読んだロンドは躊躇なく手をパーティシアに向ける。

「ちょっと遅い！」

パーティーシアが杖を頭上に掲げた瞬間、辺り一帯が紫色の光に包まれた。

「ぐつ……！」は、ビードー？」

ロンドは田の眩みを懸命に振りほどべと辺りを見回す。

草もない、土もない、あるのは水、そしてその水の上に数個の魔方陣が浮き出していた。

「ロンドが、エーデンよ」

ロンドの頭上からパーティーシアの声がした。

咄嗟に上を見上げるロンド、既に漆黒の翼が攻撃態勢に入つていた。

だが、右から伝わるマグマの衝撃がロンドの翼を鈍らせる。

ミカエルが放ったファイアーボールだった。

「サンダーbolt!」

続けざまにパーティーシアの雷がロンドに走りぬける。

「が……あ……」

ロンドはそのまま水の上の魔方陣へと落ちる。

魔方陣は床としての機能をしているのかロンドが水に落水するとはなかった。

「転移させたのは私たちだけ、心置きなく戦えるわよ、ロンド

そう言ってパーティーシアはロンドを見下した。

「あ…さ、まらあ…よくも…人間を超えたこの…僕を…地べたに這い蹲らせてくれたな…」

怒りにわなわなと震えるロンド。

「おあいにく様ですが…」

「私たちも、ただの人間じゃあないのよね」

と言い放つは2人のエターナルコア。

ロンドの怒りは沸点を超え、叫びにならない叫びを上げる。

片方が白かつた翼が次第に黒く、黒く染まっていく。

水の上にある魔方陣が次々と消えていった。

「…………だ」

右腕が変な方向に曲がっている。

どうやらやつの攻撃で折れたらしい。

田を覚ましたバーギルがいたのはどこの聖堂らしき場所だった。
そこにあるのは一本の剣。

「俺の獲物は見当たらないし……ここで我慢しておくれか……」

そう言つとバーギルは左手で剣の柄を握る。

と、剣の柄の先端の宝玉から光が漏れた。

「なん……だあ……！？」

Hドンにいたパーティーシアたちもその光を確認する。

「なに……？」

「『サタン』、あそこから不可思議な波動が……」

「あそこが…ひょっとして神の祭られている場所？」

「喋つている暇があるのかあ……」

ロンドが一足飛びでパーティーシアに襲い掛かつた。

もうロンドの皿にはパーティーシアとミカエル以外映っていない。

漆黒の翼で何度も何度もパーティーシアを防御している腕だと叩く。

「う……の……」

ロンドの翼とパーティーシアの魔法障壁がぶつかる度に、大気が振るえた。

「フレーミアー！」

ミカエルから閃光が放たれる。

ロンドはその場で回転し、もう片方の翼で閃光を打ち返した。

「……」

その時、信じられないスピードで光の上がった方向から迫った何かが閃光を弾く。

「 よお 」

バーギルだった。

見たことも無い剣を持ち、しかも空中に浮いている。

いや、剣からフイールドが形成され、それを足場として利用しているようにパーティーシアには見えた。

「バーギル… ジリシテニに… それにその剣は…？」

「あ、知らねえよ、気付いたら神殿みたいなもんの中にいた、で、こいつはそこにあるたんできつぱりった」

「私のフレーミアを簡単に弾くなんて… 何で出来るんです… その
剣」

「それも知らねえ、分かつてるのはこいつを掴んだ瞬間にこいつの使い方を理解したってことだけだ」

ガギィイイイイイー！

話しあは漆黒の翼によつて中断された。

しかし、バーギルの剣は翼の威力を持つてしまいビクともしなかつた。

「で… だ、反撃開始だぜ… 『ウリエル』 さんよ」

ロンドは肩を震わせ笑つた。

「くくくくくく… 反撃開始？笑わせる、終わりなんだよ、もう、お前たちは」

「やつてみなされやわからんねえだらうが、」のタ「一。」

「分かるさ！お前は自分が何を持っているのか分かつていいのか！」

ロンドは剣を指差す。

「さあ、出番だよ、ミカエル！」

そう言つとロンドの指先から光が照射されバーギルの剣の宝玉を経由してミカエルに当たる。

ミカエルは絶叫した。

己の中に黒い意識が高まる。

「何か」がミカエルの中から突き破るような衝動に襲われた。

刹那、ミカエルの背中が裂け、黒い光が天に伸びた。

黒い光は天に昇った後、エデンに降り注ぎ、禍々しくも神々しくも見えた。

「さあ……神の降臨だ……」

ロンドは黒い翼を広げそう呟いた。

封神の劔

『神』は6枚の黒い翼を纏い、銀色の瞳を輝かせ、邪悪な暗黒の光とともに

Hテインの中心へと降りる。

パーティーシアとロンドは神の姿に確かにロンドの今の姿を重ねた。

ロンドは喜びに打ち震えながら神の元へと急ぐ。

「神よー。」

「余を……復活させたのは……貴様か……？」

「やつです！我らルシファーの働きによって、貴方様を用意めさせることが出来たのです！」

「やつか…それは…苦労だった…」

神は左手をロンドの頭へと乗せた。

「勿体なき…お言葉…」

「だが、これで貴様も用済み…といつわけだ」

「は…？」

ロンドが疑問を口にしつづけた瞬間、
凄まじい電撃がロンドを襲う。

「ガ…ハア…！…な…ぜ…？」

神はニタリと笑うと更に電撃をお見舞いする。

薄れ行く意識の中、ロンドが聞いた神の台詞はこうだ。

「余が望むは全ての無、人間など1人もいらぬ、

余を復活させて何を企んだのかは知らぬが、安心しろ、全ての動植物を現世より消してやろう」

神の台詞が全て終わる前にロンドの意識は無くなっていた。

「くくく…余の姿を真似したところで、所詮、人間か」

ボロ雑巾を投げ捨てるかのようにロンドは神によって放られる。

「あー、すげえいい」

バーギルは震えながら笑っていた。

「バー
ギル？」

「やつは敵つてのはああいうクソみてえな野郎じゃねえとスッキリしねえよ、

「ミカエルのように純真に縋りこけたような敵じゃなくて、己の絶対的力を誇示して他人の消滅を願う、そんなクソ野郎が神だよ」

バーギルは左腕で剣を構える。

「パーティーシア...ミカエルを治してやれ、その間俺が時間を稼いでやる」

「本領で言つてゐるの...? 見たでしょ、今のあいつのトタラメな強さ

「本気も本気、あのクソ野郎をぶつた切りやあ、全ては終わるんだ、終わらせてやるよー。」

バー・ギルは飛んだ。

音速を超えるスピードで剣を振り下ろす。

神が右手を出し、その剣を止めた。

「ほう……貴様、封神の劔を使いこなせるのか？」

神が右手から雷を放つ。

雷は剣の宝玉に残さず吸い込まれた。

• श्रीमद्भगवत् १

ぐるりと反転し、その勢いのままバーギルは神の横腹に剣を叩きつける。

神に剣が当たった直後、
宝玉が光り輝き、剣の先から先ほどの雷
が迸り神を襲つた。

パーティーシアは懸命にミカエルへと治癒魔法をかけていた。

並の人間なら即死であるうその傷は少しずつ、少しずつ塞がつて
いく。

「皮肉なものね……ヒターナル『ア』である」とだが、 こんな形で役立つ
なんて」

パティーシアはミカエルの傷口から僅かに見えるエターナルコアの核の部分を見ながら呟いた。

パーティーシアはまだ治癒魔法をかけているわけじゃない、自らのエターナルコアの魔力もミカエルに連結させていた。

同じ波動を持つもの同士だから出来る治癒の方法。

「目覚めるなら早くなさい、ミカエル…いくら変な剣持ってるからってバーギルの不利に変わりは無いんだから…」

神の放つ魔法は封神の剣に吸い込まれる。

封神の剣は神の魔力を吸い取り、バーギルにそのままの力を与えた。

「全く厄介な剣だな… その剣は…」

雷球を次々と発射させながら神は言つ。

「世界に一つだけの封神具、余の復活とその使い手が現れるのが同時とは… 運命を感じるぞ、人間」

「知ったこつちゃねえよ、クソ神様よ!」

雷球を吸収し、時には避け、時には斬り、バーギルは神へと接近する。

「1000年前に余をその剣に封じたのも貴様のような赤髪の男だつたなあ！」

バー・ギルの太刀筋を避けながら神は叫ぶ。

「嬉しいよ！子孫とはいえ、直接恨みを晴らせるのだから！…」

神は6枚の翼を展開させ、その羽先をバーギルに飛ばす。

一度に500以上の攻撃がバーギルを襲つた。

ଏହାରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା - ୧

バー・ギルは吸収した雷球のエネルギーを拡散して放つ。

8割の羽先が消滅したが、2割はそのままバー・ギルへと突き刺さつた。

「がはつ……！」

「余の最大の敵は貴様というわけだ、人間」

そう言つて神はバーギルを指差した。

ペッと血の塊を吐き出し、バーギルは神を睨む。

「嬉しくないね、俺にとつての最大の敵つてやつあ、もう決まってるんでな」

バーギルは剣を構えなおす。

「ぜつてえ、テメエなんかより強いぜ、あのクソ女は」

そう言つてバーギルは笑つた。

「女…？あそこにいる人間か…確かに他の人間とは比べ物にならん波動を感じるが、所詮人間のレベル、余の敵ではない」

すつとバーギルに指された指をパーティーシアに向ける。

「証拠を見せてやろ、」

ビックと一筋の閃光が放たれた。

「しまつ…！」

バーギルはパーティーシアの方を見る。

閃光はパーティーシアに当たる直前、2つの大きな障壁によつて防がれた。

「…なんだと…？」

障壁を開いたのはパーティーシアとミカエル。

バーギルはそれを見て安堵した。

「間に合つたか…」

「間一髪つてといひ…かしら…？」

「『サタン』…私は間違っていたのでしょうか…私は全ウェイザードのためになると言われ

神の降臨に全力を注いでいました…なのに、その神は…『モナー』どこのか人間全てを滅ぼすと…」

「間違えなんて誰にでもあるわよ、ミカエル、大事なのは過去を見ることがじやなく今を見ること」

パーティーシアはミカエルに手を差し伸べる。

「生きましよう、私たちも、寿命が何よ、エターナルコアの使命が何だつてのよ、ふてぶてしく、人間らしく、最後まで足搔いてやるつじやない」

「『サタン』…」

「あいつの…受け売り、だけどね

そう言つてミカエルにウインクを飛ばす。

「不思議な…コモナーですね、あの人は…」

ミカエルは笑つてパーティーシアの手を掴んだ。

「脆弱な人間どもが…余に楯突くか…」

神はパーティーシアとミカエルを見下ろす。

「しかし…どうしますか?『サタン』、あいつにフレーミアやファイアーボールのような

小技は効かないと思われます、だからと言つて詠唱の長い大技をやろうとすれば

その隙をやられてしまひ…」

パーティーシアはそんなミカエルの言葉を聞いてふっと笑みを零した。

「力は同格でも産まれた年月の差つてやつかしら?
まだ青いわね、ミカエル、答えならあそこに転がってるわ」

そう言つてパーティーシアはロンドの亡骸を指差した。

その行動を察したようにミカエルは頷く。

「…成る程、考えもしなかつたですが…確かに、その方法しかなさ
うですね」

「あいつに出来て、私たちに出来ないわけないわ、ま、小技の方か
ら試して見ましちゃうか」

「…わかりました」

そう言つとミカエルは神を見上げる。

「…そことした話し合いは終わりか？では…殺させてもうつぞ、人間ども」

「 もちねえ！」

バー・ギルが飛ぶ。

神はその斬撃を避け、パティーシアたちの方を見直す。

そこにミカエルの姿が無かつた。

「…どこへ消えた？」

「アーティスト」

ミカルは神の後ろに回り込む

神はミカエルの言葉に反応して後ろを振り向く。

—余所見していいのかしら?」

バティーシアが掌を神へ突き出す。

その掌から巨大な閃光が奔つた。

神に当たる直前、
神の障壁によつて閃光は弾かれる。

「脆弱な人間が…詠唱を破棄した…だと？」

神はパーティーシアの方へと振り返る。

今度はミカエルの掌からマグマの弾が神へと発射された。

「ちいい！」

神が6枚の翼を丸め、マグマを弾く。

「貴様も詠唱破棄か！」

神はミカエルに向かつて右手を振るう。

風の刃がミカエルに向かい、情け容赦なく飛んだ。

「余所見…してんじやねえよ!」

バーゲルが割り込み、風の刃を吸收する。

「あなたは自分の心配をしなさい、コモナー、その剣、神の魔法は吸収出来ても、

私たちのは出来ないのじょ、つ・巻き添えを食こますよー。」

ミカエルが右手を上げる。

瞬間、神を中心に大爆発が起こった。

「うおおおおおおおー。」

爆発の衝撃で吹き飛ぶバー・ギル。

がしつと途中で座標転移したパーティーシアに受け止められる。

「しっかりしなさい、バー・ギル、
あんたにはその変な剣であいつに止め刺すって役割があるんですね
から」

「…止め…？てめえ、封印がどうとか…」

「そんな昔のこと、忘れたわね、倒せるんなら、倒したほうがいい、
そう判断しただけよ」

パーティーシアは髪をかき上げながら言った。

その言葉にバー・ギルは笑みが止まらなくなりそうだった。

「…く、くくく、よししゃ、あのクソの魔法は全部俺が吸い込んで
やらあー、
てめえら攻撃に専念しろおー。」

爆発した中心部から八方に電撃が飛び。

バーギルはパーティーシアに当たりそうになる電撃を封神の剣で吸収する。

ミカエルの右手から雷が、パーティーシアの左手から氷の刃が放たれた。

神は左右の手で障壁を発生させそれをガードする。

と、同時に翼から黒い羽先を3人目掛けて発射した。

「全部纏めて消し去つてやらあ！」

バーギルは剣を握る手に力を込める。

…が、パーティーシアがそれを制した。

「あいつの魔法は出来るだけ蓄えなさい、その剣の耐えうる許容範囲、ギリギリまで」

ミカエルとパーティーシアは同時に両手を前に出す。

虚無の空間が現れ、羽先を根こそぎ吸収した。

「モナーーーその剣で受け取つてください！」

虚無の空間が一つ、今度はバーギルの前に現れる。

そこから一つとなつた巨大な黒い塊が出てきた。

バーギルは封神の剣を塊に向ける。

剣は塊を飲み込むように吸収した。

神は激昂した。

「下等な人間が！この余に、神である余に仇をなすか！？」

ミカエルは神の真下に座標転移しながら落雷を落とす。

「あなたは神じやありません、悪魔です」

次にパティーシアが神の背後へ座標移動しながら風の刃で攻撃する。

「悪魔は淘汰されるものなのよ」

2人の攻撃は肉体的にはそんなに効いていなかつたが精神的にはかなり効いていた。

「黙れ… 黙れ黙れ黙れ！下等種族どもめ！！」

神を中心に黒い閃光が解き放たれる。

バーギルはその瞬間に神に斬り込んだ。

「てめえが堅いのはその妙な『壁』のせいだろ！？取つてやるよ、
その邪魔なもんをよお！」

宝玉が光輝く。

神の周囲に展開された障壁が封神の劔に吸い込まれていく。

「余の障壁が……！」

神がそう言った瞬間、二つの雷撃が神を直撃した。

かは！」

神の動きが瞬間、止まつた。

‘**એક સુધી એક સુધી એક સુધી એક સુધી**...’

ハキルが動く

神の残された防衛方法 翼を狙って

一瞬に6つの衝撃を加える

神の翼は根元から6枚
引き裂かれた。

人間とも！人間とも！人間ともがああああああああああああ！！！！！」

神は手当たり次第に魔法を乱打した。

もう神の目には何も映っていない。

あるのはちつぽけだと思っていた3人の人間の存在に対する憎しみ。

そして、その3人に對する恐怖だった。

神の周りに4つの光の柱が作られる。

柱は線で結ばれ神をその中へと閉じ込めた。

「『サタン』！『モナー』！」

ミカエルの作った監獄と言葉を合図にパーティーシアはバーギルの所へと座標転移。

そして剣の柄をバーギルの手の上から握る。

「パーティーシア…」

「余所見しない！」これからこの剣に蓄えられた魔力に私の魔力を上乗せするわ、

そしたら目もくれず、あいつに突っ込むわよ！」

パーティーシアの全身が光る。

呼応するかのように封神の剣が輝きだした。

「行くわよ！」

「おおおおおおおおおおおおおおおお…！」

ドンツーという音と共にパーティーシアとバーギルは神に突っ込んだ。

「ミカエル！『光の枷』を解きなさい！」

パーティーシアの叫びとほぼ同時に監獄が解除される。

その1／100秒後、封神の剣が神の胸に突き刺さった。

神は絶叫する。

刺さつた剣を抜こうともがく。

だが、もがけばもがく程に、剣は食い込んでいった。

「貧相な神様」このはこれで終いよ、さよなら、神様」

パーティーシアが手に力を込める。

バーギルは剣を下に薙ぎ降ろした。

神は胸から下が真つ二つに裂け、体中から黒い蒸氣が漏れる。

「余が…消え…る…！？余…の体が…あああ

神はその言葉を残し黒い蒸氣となりこの世から消え去った。

「終わった…のか…？」

バーギルは呟く。

「どうやら、そのようですね」

ミカエルが2人に近づきながらそう言った。

「まだ、終わりじゃないわ

パティーシアが言つ。

「まさか…まだ…？」

そのミカエルの言葉にパティーシアはゆっくり首を横に振つた。

「ううん、あの神との戦いは終わった、けど、居るでしょう。
私たちにこんな苦労をさせた張本人が」

その言葉にミカエルがあつという表情をした。

「バークレイ様…いや、バーカレイのことですね」

「もうこいつと、全てを終わらせに行きましょう」

「悪いが俺はここまでだ」

バーギルがうつらうつらとした表情で言った。

「バーギル？」

「どうやらこいつを一度使つて一年くらい冬眠しなきゃいけない副作用があるらしくてな、
実を言つともう眠い…」

そう言つとバーギルの『足場』が消える。

慌ててバーギルを抱きかかえるパーティーシア。

「だから…あと最低1年…は、死ぬんじゃねえぞ…パーティーシア…
決着はま、だ…ついで…」

そのままバーギルは深い眠りに落ちた。

パーティーシアはバーギルの頭をそっと撫ると、

「わかつたわよ、貴方との決着がつくその日まで私は生き続けるわ」

そう言って、寝ているバーギルのオーテコに軽くキスをした。

地上に戻ったパティーシアたちはバーギルをクレシスたちに託し、
バークレイの元へと飛んだ。

- ルシファー本部作戦参謀室 -

パティーシアとミカエルにとつてはルシファーの防衛網など破れた虫網みたいなものだった。

2人を容易くバーカレイの元へと運ぶ。

「全てに決着をつけに来たわ、バーカレイ」

「これで終わりです」

2人の言葉にバークレイは深く椅子に座つたまま笑つた。

「神までも敗れる…か、作るんじやなかつたよ、貴様らの様な欠陥品はな…」

そう言つてバーグレイは懐に持つていたナイフで自らの首を搔つ切つた。

この日、世界最大のウィザード組織、ルシファーは崩壊を向かえた。

「これから、どうするの?..」

パーティーシアの問いにミカエルは微笑みで応える。

「残された時間、世界中を旅しようと思つています

ミカエルは両手を広げて空を見た。

「『』の広い広い世界を今度は私の目で見て、手で触れて、感じていきたい」

「そう」

パーティーシアも空を見て微笑んだ。

「あなたはどうするんですか？」

ミカエルの言葉にパーティーシアは微笑みが増す。

「私？ もちろん - - - - -」

その言葉にミカエルは一言、「羨ましいです」と答え、微笑んだ。

風が2人の間を吹き抜けて、時代は新しく移り変わる。

道を探すわ、ウィザードと『モナー』が手に手を取り合える、そんな道を…ね。

完

どうも、はじめまして。

最後まで読んで頂きありがとうございました。
初めてのオリジナル、長編（短いですが＾＾；）といつことで
かなりグダグダですが少しでも楽しんでいただけたら幸いです。
では、また次回作があればその時、お会いしましようノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7387/>

エターナルコア

2010年10月9日03時09分発行